

第22回Kozoomサロン テーマ「映画」について

清水健二

私にとって映画の記憶は、チャンバラの活動写真から始まる。職人だった親父は1日、15日の月2回の休日に、私を連れ出してよく近くの映画館へ行ったことを思い出す。映画は下町に住む庶民の娯楽の代表的存在だったので、多くの人達の集まる場所だったのである。古い記憶の中に残っているのは、大河内伝次郎扮する「丹下左膳」であり、嵐寛寿郎の「鞍馬天狗」である。

私は中学生の頃は近鉄布施駅から南に歩いて、隣接する大阪市生野区に住んでいたもので、映画館は布施駅の近辺に4～5館あったように覚えている。中学の頃には一人で行くことに慣れ、当時は2本立てが普通で、一旦入場したら入れ替え無しだったので、いつまでも観ていたものである。邦画が主流で洋画は2割程度だったように思うが、たいてい邦画を観ていた。「青い山脈」や「暁の脱走」、「羅生門」など印象深い作品は枚挙にいとまがない。

高校時代に現在の八尾市に移り住んで約70年になった。旧の近鉄八尾駅周辺は古くから交通の要所だったことから、街道筋沿いは商店街で賑わっていた。今も八尾銀座という名前が残っていて映画館があった。駅周辺に4館もあったが現在はすべて消滅し残っていない。しかし最近は新しく同一施設内で複数のスクリーンを持つシネコンが主流となり、スクリーン数で12箇所もあり選択も自由にでき、便利で良い雰囲気の中で鑑賞できるようになった。当時は映画の全盛期だったので邦画は八尾駅前で、洋画を楽しもうと思えば布施駅まで出かけ、ロードショーなどは難波まで出て行った。



八尾の昔の映画館



現在の八尾のシネコン設置のビル

鑑賞した名画も断片的にしか思い出せないが、印象的なシーンは頭のすみに残っている。「第三の男」のラストシーンで並木道を歩く女性の映像は忘れられない。またチャップリンの「モダンタイムス」のラストシーンを観た時は、もっと強く感動した。「モダンタイムス」は「第三の男」よりはるか昔に制作されていたので驚いたものである。



「モダンタイムス」のラストシーン



「第三の男」のラストシーン

また、松本清張の「砂の器」で吹雪の山陰の海岸線を放浪の親子が歩くシーンも情感溢れる写真に胸打たれた。何と言ってもモノクローム映画では宮川一夫カメラマンは数々の名作を残し、美しい光と影を演出していて忘れられない人であった。「羅生門」に出演している京マチ子を撮った、氏の独特の現像技術を創出した映像写真は、そのコントラストの美しさに魅了された。以来私を写真好きにさせたことも映画の影響だと思っている。

邦画、洋画を問わず個々の映画について語ることは別の機会にして、今回は古い時代の場末の映画館の「風景」を思い出して書いてみたいと思う。

中学時代から高校時代の映画館は、大抵同じような建物の作りで正面軒下に手描きで出演し



「羅生門」の京マチ子

ている役者の顔がずらっと掲げられていた。映画は白黒なのに看板は極彩色で役者の顔も見事に描かれていた。それを仕事にしていた上手な絵描きが多くおられたのでしょうか。料金は場末に行くほど安かった。チケット売り場でチケットを買い、会場の入り口は現在のような観音開きの防音扉でなく、分厚い黒いカーテンを割って入った。観覧席はわずかな傾斜だけで階段状になっていなので、前後の座席は殆ど高低差がなかった。席の前にでかい体格の人が座っていたり、帽子を被ったりしているとスクリーン全体が見えないので、ちびだった私は前の人の肩越しに見るか席を立たねばならなかった。

正面スクリーンの舞台から離れた左右に便所があって、前の席に移ると両脇からは映像が歪んで見づらばかりか、便所の匂いが漂って来たものである。それでも割合平気なもので辛抱して観ていた。

使い回しのフィルムは画面がとんだりしたし、切れたりすると映写室に向かって観客が大声で「写ってへんで！」とか「何しとんや？早よ 写さんか！」と怒鳴っていたものである。

上映中は煙草を吸う人はなかったが、休憩時間には煙が漂っている中を、駅弁売りの人のように首からカゴを吊るした売り子のお婆さんが、ラムネや煎餅、スルメの足などを売り回っていた。暑い夏などは天井に設けられた二枚羽根のプロペラがゆっくり回っていたが効果のほどは如何だったのだろうか。ある時は2階の前席から、こっそり胡椒をまいた悪い奴がいて、下に座っていた客が一斉にクシャみしたことに笑ったこともあった。

時代劇は、勧善懲悪のストーリーで判り易く、鞍馬天狗のように悪い奴を懲らしめに白馬に跨がり走る場面には、観客がスクリーンに向かって拍手して応援するような素朴な人たちが多くいた時代だった。少々の劣悪な環境の中でも場末の映画館もよく客は入っていたものである。

モノクローム映画から徐々にカラー映画へ、更にシネマスコープと急発展していった。アメリカの西部劇はそのスケールの大きさや立体的な音響効果に圧倒されたものである。

日本映画「七人の侍」を下書きに、「荒野の七人」などの西部劇が生まれるなど、黒澤明監督を初めとして海外で評価され出した日本映画は、格段に面白くなって、映画界は全盛期に入っていた。調べてみると私が社会人になった頃の1958年には年間入場者は11.3億人、つまり10歳以上の人口で1億人とみて、映画館に足を運ぶ人はその半数としても、月約2回は観ていることになるから、興

業者は笑いが止まらなかったことだろう。2021年では映画館に行く人は1割になったようで、TVの普及による影響だが 映画を楽しむ人には変わりはないようだ。ちなみに映画の公開本数は、1958年は邦画で約500本、洋画で約200本。2021年では邦画で約500本、洋画で 約450本で、1.3倍に増加しているという。

さて珍しい話として、前述したように約70年前、私が八尾の地に住むようになった当時、4軒あった映画館の1館は時々、無声映画を上演し、弁士と数人の楽団員がスクリーンの横に配置していた。これは人形浄瑠璃における太夫と三味線弾きや、歌舞伎における出語り、覗きからくり芝居のように舞台と語り手の構成で客を楽しませる日本の伝統的な構成で、無声映画もその延長線上にあって馴染んできたように思う。しかし時代と共に弁士や楽団員の代わりに画面内に台詞を文字で示したり、ナレーションに変わっていった。チャップリンの無声映画もこんな形で残されて来ているのはご存知の通りである。

2014年に大坂夏の陣400年祭の記念行事があつて、「大坂夏の陣・甦る八尾の戦い」をテーマに東大阪市と共催のシンポジウムがあり、これに参加した時、「木村長門守(木村重成)」という武将の無声映画が公開された。西軍の武将で22歳の若さで散つたが、その墓が東大阪市と八尾市の境にあり、八尾市の公園になっている。冬の陣、夏の陣と波乱万丈の武将を語るにふさわしい話を、85年前に作られ主演に美剣士スターだった市川百々之介(愛称ももちゃん)が扮している。私など全く知らなかった役者だった。弁士は澤登翠(さわとみどり)という女性弁士で、楽団代わりにテープに録音された伴奏を使い、美声を聞かせてもらった。現在でも継承者として消滅しつつある芸能文化を残したいと活動されていてその気概に敬服している。



「木村長門守」の無声映画

生活の中に溶け込んできた映画も、技術の進歩で映像表現も多様化してきたし、人々の価値観も

変わってきているが、映画の本質は変わっていないと私は思っている。憂さ晴らしに映画を楽しんだり、辛いことも気持ちを切り変えるヒントを与えてくれるし、生活に潤いを提供してくれるからである。私などその頃の自分の生活の中で、喜怒哀楽が同時に思い浮かぶほど、映画と暮らしが直結し共存している。感受性の濃い少年期から青年期に、映画から教えられることが多かったことを、今でも強いインパクトを受けていたものだなと思い出す。人間の業とも言うべき愛憎の深さや、自分が経験したことのない世界を知り疑似体験ができるなど、好奇心も大いに刺激されて大人に近づいた気分になったものである。

昔の映画館のみずぼらしい環境とは格段に良好な現在の映画館になったが、この歳になっても私の人生の有りようを教えてくれる名作に出会えることはありがたいことだと感謝している。

令和4年4月記